

「認知症リスクの軽減のポイント」

札幌医科大学医学部
神経内科学講座教授
下濱 俊氏

内閣府が発表した「高齢社会白書」（2017年版）によると、65歳以上の認知症高齢者の数は2025年には730万人と推計され、高齢者の5人に1人は認知症になると言われている。5年後に高齢者が全人口の30%を超える超高齢社会を迎える中で、早急な社会対応が求められる。そこで認知症の専門医である札幌医科大学の下濱俊教授に、認知症で悩まないための基礎知識やリスク軽減のポイント、正しい対処法について、わかりやすく解説してもらった。



の記憶を忘れる」「新しいことが覚えられない」

しますが、段取りが立てられなくなります。

クを起こすこともありま

などがこれにあたります。また「見当識障害」というものもあります。時間や場所、人の認識ができなくなります。症状が進むと「今日は何月何日

——具体的にどういったことができなくなりましたか。

——ものの名前がでてこなくなるといいう症状もよく聞きますが。

で、どこににいるのか」がわからなくなり、子どもや兄弟など近親者ですらわからなくなるケースもあります。

例えば日常の生活で「テレビのスイッチを入れる」や「電子レンジを使う」「自動販売機で飲み物を買う」など単純な行動ですらできなくなり、それがきっかけでパニック

それは「失語」という症状です。そのほかにも、ものが何かわからないなどの「失認」、服の着方がわからないなどの「失行」という症状もみられます。

中核症状と行動・心理症状

——社会問題になっている「徘徊」も見当識障害が原因ですか。

——患者との接し方で注意する点がありますか。

うして忘れるの」と言われることで落ち込んだり、うつになるケースもあります。

はい、そうです。地誌的記憶障害のため、自分の居場所がわからなくなり、徘徊するというケースをよく見かけますね。これも見当識障害が原因です。

記憶障害があると本人も「なぜすぐに忘れてしまったのか」「どうしてこんなことができないのか」と焦燥感に駆られ、不安になります。

さらには自分で片づけたことを忘れて「盗まれた」と思い込む「もの盗られ妄想」のような被害妄想もみられることがあります。

——認知症は、どういった症状を呈しますか。認知症は、正常に発達した脳機能が、後天的な病気によって持続的に低下して、社会生活に支障をきたす状態のことをいいます。

まず代表的なものは「物忘れ」と呼ばれる「記憶障害」です。「さっき言ったことが思い出せない」や「覚えていたはず

その症状は大きく分けて「中核症状（認知機能

障害）、「行動・心理症状（BPSD）」のふたつがあります。

そのほかには「実行機能障害」というものがあります。通常私たちは前もって計画を立てて行動

あるいは家族から「さっき言ったじゃない。ど

「焦燥感に駆られる」「うつになる」「被害妄想を



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)